山崎郷土研究会報

NO. 121
25.8.25
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
大谷司郎

新会長就任の挨拶

大谷司郎

本年度の総会で会長の大任を仰せつかり、我身の非力さも顧みませずお引き受けした次第であります。会員の皆様にはなにかとお世話になりますが、よろしくご指導ご協力をお願いいたします。

私は、当会に入会しましたのは昭和五十年代だったと思います。それから、会報部に所属し、故長田重男さんの後を受けて会報部長として昭和六十年（会報六五号）から二十八年間務めさせていただきました。

創刊号が昭和三十三年六月に発行されて以来、今回で一二一号を数えており、この間五十五年の会報の重みを感じざるを得ません。一号に付き平均五件の郷土研究のレポートが書かれているとして、延べ六百件に及ぶレポートが発表されてきたことになります。それぞれが今貴重な資料となっています。市立図書館には創刊号以来、現在発行までの各号の会報が保管されており、勿論閲覧ができますので、ご一読ください。

私は昭和五十年前後に、仕事で山崎町史編集に関係させていただいたことをきっかけに、郷土史に興味を持つようになって以来、町史の編集長であった、今は亡き宇野正碌先生に古文書解読の手ほどきをしていただきながら、村方文書等をグループで読んだものでした。

その頃から、古民家が建て替えられたり、公民館が改築された

目次

新会長就任の挨拶 …… 大谷 司郎 …… 1
会長退任の挨拶 …… 春名 俊夫 …… 2
宇野構遺跡現地説明会資料紹介 …… （公財）兵庫県まちづくり技術センター 3
平成二十四年度市指定文化財指定について
西光寺所蔵のものを中心に …… 宍粟市歴史資料館 7
「天地明察」と闇斎先生 …… 鎌田 裕明 12
第九回山崎ウォーキング&ウォッチング
篠の丸城跡見学会に参加して …… 竹内 克司 18
新篠の丸私記（四） …… 深川 定義 19
二十五年度の研修旅行のお知らせ・事務局だより …… 23
平成二十五・二十六年度役員名簿 …… 24

りする度に、廃棄される憂き目をみる古文書があり、後で聞いてがっかりすることも何度かありました。紛失の危機にさらされていると分かっていながら、何ら手立ての打てない無能さと苛立ちを感じていました。今もその状況は変わりませんが、ことあるたびに古文書の大切さを呼び掛けていこうと思っています。

前会長の春名俊夫さんは、歴史や地理に見識が深い方で、リーダーシップを十分に発揮していただきました。私ごときが及びもしませんが、今後会員の皆さんと協力して、本会の存続と拡充を図り、郷土史愛好家が増えますことをお願いして就任の挨拶といたします。

会長退任の挨拶

春名俊夫

平成二十五年四月に開催された郷土研究会総会で、会長職を退かさせていただきました。顧みますと、平成十一年より郷土研究会の役員として、お世話になりました。

平成十四年度よりは、岸本正理さんが体調をくずされ退任のあと事務局長を仰せつかり、五年間お世話させていただき、平成十九年よりは森本会長のあとを受けることになりました。会長として偉大な業績を残された先輩の後でどうしょうかとおもいながらも三期六年の日が経ちました。幸い副会長に、学校の先輩でもある浅田耕三さんや、事務通の宗平圭司さんがついて下さったので、大船に乗ったような気分で務めを終えられたと思っています。

在任中特に大きな事業のようなものはありませんでしたが、「宍粟市」の進める「かわまちづくり」事業の地域団体の一員として検討会に参加させていただき高瀬舟着場、浜御殿等の遺跡をどう残すかの方法に意見を述べてきました。新しくこの事業で出来る護岸の頂部は散策路としてサクラを植栽し名称は「歴史の道」とすることになっています。この事を新潮会の皆さんに聞いていただく機会もいただいた事などが印象にのこります。また、「もみじ祭」・「ウォーキング&ウォッチング」事業などにも二十四年度から参加するなど会員の皆様に迷惑もかけました。反面、会の財政的助けにもなりました。

新しく会長にお願いできた大谷氏他の運営陣営も強固な布陣となって本会の発展のために、大いに活躍していただけるものと確信いたしております。

会員の皆様にも、これからも一層、自己研鑽に励まれるとともに、新会長様はじめ諸役員と協力して、山崎郷土研究会が益々発展しますようにお祈りいたします。

最後になりましたが、至らぬ私に賜りましたご理解と、暖かい御支援によりまして、職責を終えることが出来ましたことを重ねてお礼申上げ言葉足りませんが退任の挨拶とします。

有難うございました。

宇野氏の居館跡を確認

～伊水小学校東側通称「天守公園」が櫓（やぐら）跡か～

（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

（資料提供）

本年二月十六日、山崎町宇野のある市立伊水小学校東側の通称天守公園付近で埋蔵文化財発掘調査が行われ、その現地説明会が実施されました。以下、当日の説明会資料を元に紹介します。

宇野構遺跡（うのがまえいせき）現地説明会資料

兵庫県西播磨県民局龍野土木事務所による（砂）長水川通常砂防事業に伴い、（公財）兵庫県まちづくり技術センターでは、宍粟市山崎町宇野に所在する「宇野構遺跡」の発掘調査を実施しています。

宇野構遺跡は、戦国時代に活躍した赤松氏の有力家臣である宇野氏が築いたといわれ、同氏の本城である長水城跡の山麓の居館とされています。

調査は平成二十四年十二月下旬から平成二十五年三月までの予定ですが、ようやく全容が明らかになりましたので、現地説明会を開催いたしました。

調査区全景（南西から）

長水城と宇野構遺跡

○調査の成果

今回の発掘調査は構（かまえ）の北東に位置する小郭の約三分の一と、その斜面について実施しています。

調査の結果、長さ35ｍに及ぶ大規模な石垣が見つかり、合わせて戦国時代末期の備前焼擂鉢・甕・壺や、石製品の石臼、瓦などが出土しました。

出土した石垣は高さが0・6～1・0ｍほどですが、頂上までの斜面には一面にグリ石が出土しています。このため石垣の元々の高さは3ｍほどあったと考えます。

石垣は大型の石材を使用しますが、裏にはグリ石と呼ばれる裏込め石が多量に見つかりました。その他、石垣の積み方や技法は近世城郭の石垣と比べても遜色ありません。

○調査成果から見えてきたこと

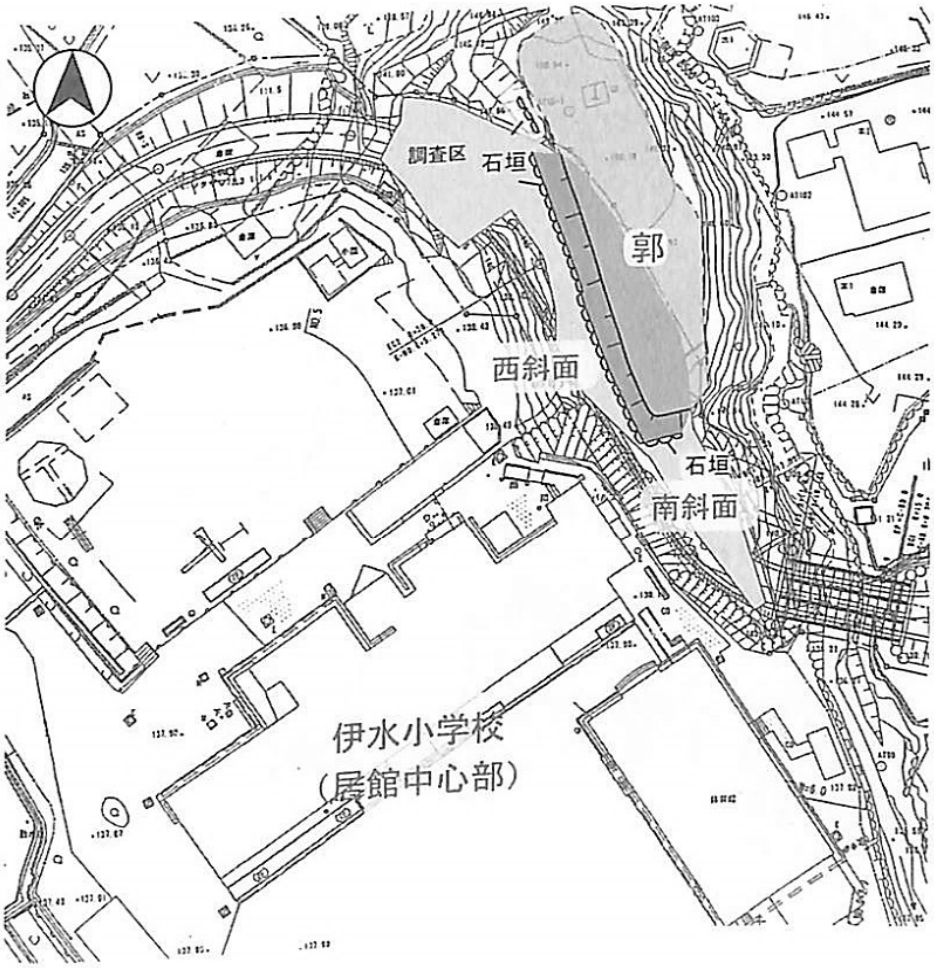
伊水小学校は字「構（かまえ）」と呼ばれて、居館の中心部がありました。

さらに、かつては土塁が残されていたといわれ、周囲を土塁が囲んだ構造が想定されます。

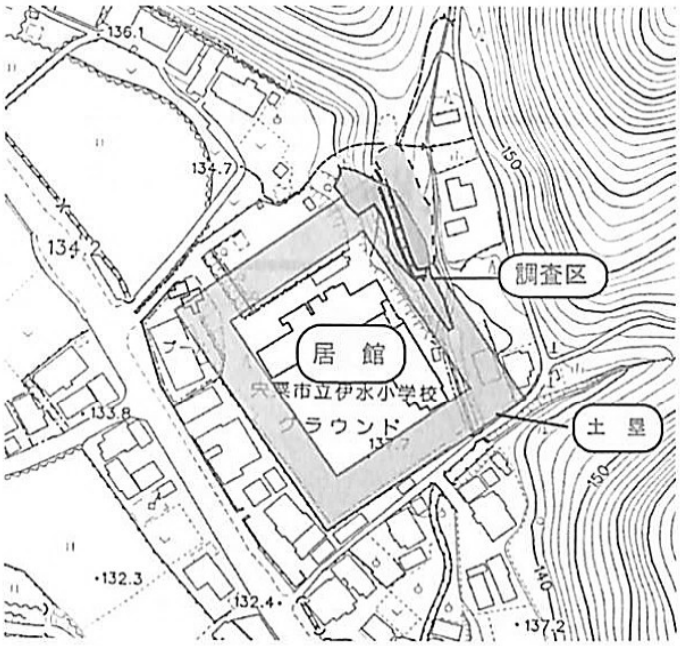
一方、調査地は居館の北東側を南北に覆う位置にあるので、土塁線の一角を担っていたと思われます。

ただし、居館内部とは比高差が15ｍもあり、通常の土塁（10ｍ未満）とは考えられません。

今回の調査でも大規模な石垣が築かれ瓦が出土していますので、頂上には石垣を土台とする瓦葺きの櫓が建ち、厳重な防御施設の構築が推測されます。



調査区位置図



居館想像図

○検出された大規模な石垣

石垣は頂上の西側と南側を囲んで見つかっています。

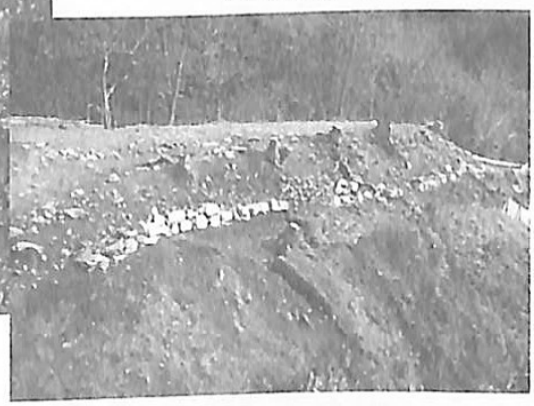
検出範囲は西斜面が長さ35m、高さ0・6～1・0m、南斜面が長さ3・3m、高さ50～70mで、西斜面は北側に、南斜面は東側にさらに伸びていたと思われます。

石材は周辺の山石で、長さ30～80cm、奥側（控え）が50～80cmの大きなものを使用しています。

石垣は頂上より3mほど下で検出されましたが、斜面には一面にグリ石が散乱しますので、元々は頂上まで（高さ3m）石垣が存在した可能性が高いと思われます。

検出された大規模な石垣

調査区全景（南から）


石垣全景（北西から）

グリ石近景

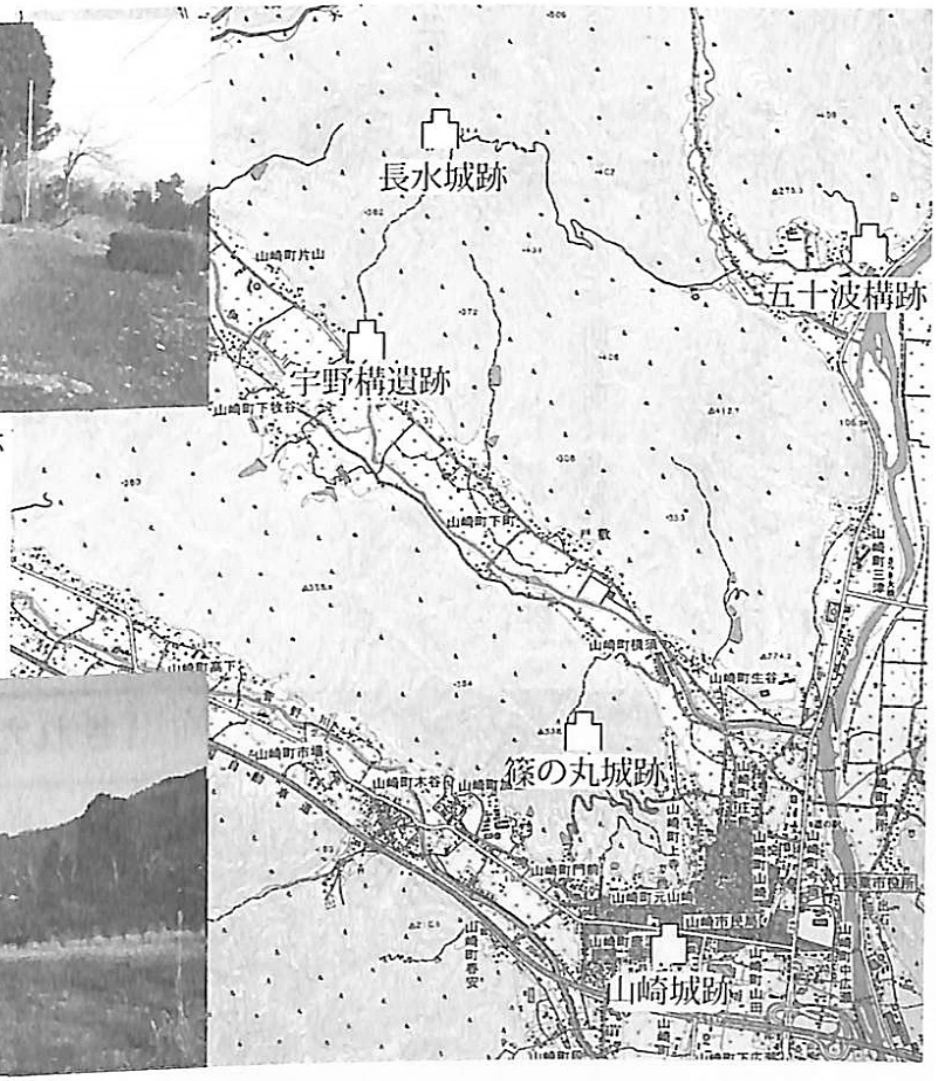
石垣および間積め石の近景

石垣北端近景

石垣隅角部近景

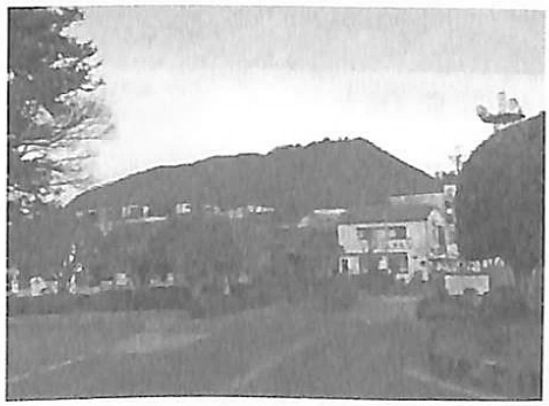
宇野構遺跡と周辺の城と居館

長水城跡



五十波構跡と長水城跡
（構跡から長水城跡▼遠望する）

山崎城跡（現存する紙屋門）



篠の丸城跡（山崎城跡から望む）

平成二十四年度市指定文化財指定について
―西光寺所蔵のものを中心に―

宍粟市歴史資料館

はじめに

平成二十四年度、宍粟市教育委員会では、以下の六点を市有形文化財として指定しました。

①「池田恒元寄進楽器・弓矢」七種十五点　附納箱〔美術工芸品―工芸品〕（宗）山崎八幡神社蔵

②「山崎八幡神社文書」十五通　附納箱〔美術工芸品―古文書〕（宗）山崎八幡神社蔵

③「池田光政三社託宣附納箱」一幅〔美術工芸品―書跡〕（宗）山崎八幡神社蔵

④「絹本著色　釈迦三尊十六善神像」一幅〔美術工芸品―絵画〕個人蔵

⑤「絹本著色　圓空像」一幅〔美術工芸品―絵画〕（宗）西光寺蔵

⑥「絹本著色　伝吉光女像」一幅〔美術工芸品―絵画〕（宗）西光寺蔵

本来ならば、各文化財についてご紹介させて頂くべき所ではございますが、紙面の都合上、今回は⑤・⑥の絵画資料について解説させて頂きます。なおこの度の指定に際しては、兵庫県立歴史博物館の橋村愛子学芸員に調査を依頼し、所見を頂きましたので、本稿では氏の見解を基に、報告させて頂きます。

一、中世の西光寺について

西光寺は宍粟市山崎町御名に位置する、浄土真宗本願寺派の寺院です。宍粟市内では最多の門徒を有する真宗寺院で、その歴史は南北朝時代にまで遡ると伝えられています。

西光寺所蔵の『順譜　摂州山西光寺由緒』の記述によると、開基は広瀬出羽守清康（頼康とも）の長男、広瀬朝村であるとされます。広瀬氏は播磨を治めた赤松氏の一族で、宍粟郡長水城の城主を代々務めたとされます。

しかし朝村は病弱のため跡を継がず、出家して円空と号し、比叡山で天台宗を修学します。比叡山を降りた後、本願寺五世の綽如のもと浄土真宗に帰依し、当時赤松氏の所領であった摂津国河辺郡波花荘（現尼崎市付近か）に一宇を創立します。永徳元年（一三八一）二月九日、円空は長水城主広瀬則親の義兄である関係から、現在の山崎町御名へ「摂州山西光寺」と号して寺基を移し、広瀬・宇野両氏の菩提所として境内・祭掃料を寄付されたと『順譜』では伝えます。

『順譜』以外の史料としては、天正年間に発給されたと推測される西光寺の諸公事を免許する「宇野祐清判物」、天正十九年に

発給された「夫役免許状」等が確認されています。これらの史料からは、西光寺が現地領主により慣例的にその地位を認可されていたことが伺えます。

中世後期の西光寺については『順譜』にも詳細は書かれていませんが、石山戦争時の戦況を記す「丹波守澄忠」なる人物の書状の写しや、播州坊主衆・門徒衆宛に発行された、本願寺十一世顕如の書状の写し等が現存しています（『兵庫県史 史料編 中世3』）。また西光寺五世の了海が石山戦争に参加したとする寺伝も残されるなど、本願寺との強い繋がりを伺わせます。

円空像　本紙

二、円空像について

絹本著色　掛幅装

縦一一三、五cm　横六二、〇cm

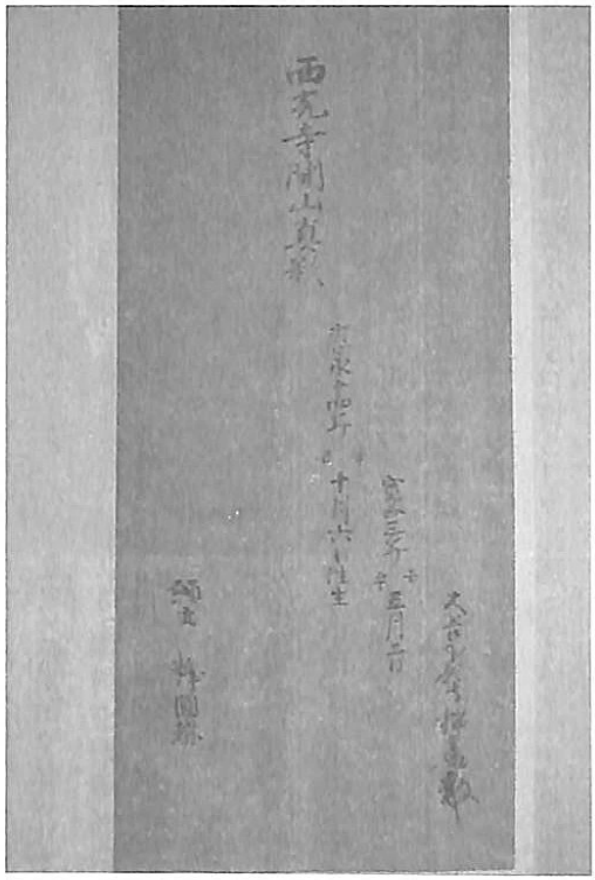
画賛「億念弥陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如来號
應報大悲弘誓恩
釈圓空」

裏書「大谷本願寺釈蓮如（花押）
寛正三年〈壬午〉五月二日
應永十四年〈辛丑〉十月六日往生
西光寺開山真影
願主　釈圓琳」

本図は、西光寺の開祖とされる円空（広瀬朝村）が曲彔（椅子）に座す画像です。十年ほど前に、専門業者の手で修復されていますが、制作当初の様相をよく残しています。

本紙は一枚絹であり、通常画像に用いる絹と比較してきめ細やかな材質で、像主の衣服を用いて制作された可能性もあります。画像上部に賛文として四句の偈（正信念仏偈）と像主の名が墨書され、画像下部には曲彔に座し念珠を持つ、円空と見られる人物

が描かれています。像主の表現・体勢のバランスから、絵手本の転写のように形式化されていない、すなわち本願寺お抱えの絵師により独自に制作されたものと考えられます。



円空像　裏書

特筆すべき表現技法として、浄土真宗の僧である画主が曲彔に座している点が挙げられます。曲彔は主に禅宗の僧が座すものであり、同時期の絵画で真宗の僧が座している例は、全国的に見ても非常に珍しいと思われます。これは、像主である円空の出自が武士であり、かつて天台の僧であったことが関係しているのではないかと推測されています。僧侶以外では、武将の肖像画にも法被を掛けた曲彔に像主が座す事例が数点確認されており、これらと比較検討しても、円空（朝村）が広瀬氏の血脈を継ぐことを示すための表現ではないかとも考えられます。

蓮如花押　拡大図

裏書には、西光寺二世である円琳が願主となり、寛正三年（一四六二）五月二日に本願寺八世蓮如より拝領したことが記されています。応永十四年の干支を「辛丑」としていますが、本来は「丁亥」であり誤記がみられます。干支の誤記こそあるものの、裏書の様式は他の寺院が所有する蓮如の下付画像等の裏書と比較してさほどの差異は見受けられません。署名・花押部分は慈願寺（大阪府八尾市）蔵画像の寛正二年の裏書と同形であることから、蓮如の真筆と考えられます。

本願寺に帰参した寺院には、名号や本願寺宗主像・仏画等が下付されました。それらは帰参したことの証明でもあり、しばしば帰参寺院・門徒側からの依頼に応じて授与されました。開山上人の画像の下付事例はそれらと比較して少なく（大阪府堺市真宗寺蔵道祐絵像など）、珍しいものといえるでしょう。

円空画像制作の詳しい経緯は不明ですが、後世の史料としては前述の『順譜』の円琳の項に

（中略）寛正三壬酉年仲夏路東大谷第八祖御門主蓮如上人

エ父円空之生像ヲ願ウ聞キ届有テ（以下省略）

とあり、円琳が父円空の遺徳を偲ぶために求めたことが記されています。

また、太平洋戦争時に供出され現存していませんが、かつて西光寺が所有していた「明暦四戊年三月」（一六五八）の日付を持つ梵鐘に像の由緒が記録されていました。以下に該当部分を抜粋します。

（中略）以應永十四年十月辛丑一朝ニ端坐而寂于西光／
矣嫡子大谷之圓琳以世也寛正三年壬酉仲夏第八祖／
洛東大谷之門主蓮如老上人筆于空師遺像之畫／
圖上而自賛以所恩附于琳師琳拜□而以為自／
門永世重寶也（以下省略）　※□は「桑」へんに「頁」

この梵鐘の銘文と『順譜』の記述は非常に類似した内容であることから、両者の成立は近い時期か、あるいは片方の記述をもとにもう一方が作成された可能性もあります。

これらの寺伝と併せて、本史料は西光寺の歴史、加えて西播磨地域の真宗史を考える上でも非常に重要な史料となるでしょう。

三、伝吉光女像について

伝吉光女像　本紙

【本紙】

絹本著色　掛幅装

縦四六、〇cm　横二九、四cm

画賛「南无不可思議光如來

南无阿弥陀佛

歸命盡十方无碍光如來」

※「碍」は石（いしへん）を抜いたもの。

本図は、浄土真宗本願寺派の宗祖と位置づけられる親鸞の母、吉光女（貴光女）とされる人物の画像です。

本紙には上質の一枚絹を使用し、画像の上部にいわゆる九字名号、六字名号、十字名号が墨書されています。画像下部には高麗

縁の上畳に座し、数珠を持ち合掌する俗形の女性像が描かれています。本紙は画面が多少切り詰められており、制作当初には画面右側と下部に若干のゆとりがあったと推測されます。あるいは画賛の墨書も同時期に加筆された可能性もあります。画主は小袖の上に、より高価な小袖を打掛として羽織っており、これは室町後期の上流武家階級の女性にみられる服飾です。

制作年代は室町～安土桃山時代と推測されます。当該期の俗形の女性像は類例が少なく、絵画史上でも貴重な事例といえます。

伝吉光女像　上半身拡大図

特筆すべきは画主の表現で、金糸や金泥・顔料を積極的に用いた技法が施されており、これは非常に高貴な人物を描く時に用いられたものです。

本図は由緒書とともに保管され、それにより画主は吉光女として伝来されてきました。由緒書の記述では、本願寺の宝蔵に納められていたものが円琳の代に下付されたと伝えられています。

吉光女の実在には諸説ありますが、本図がそのように伝来されたという経緯は興味深く思われます。前述のように、西光寺は出自を広瀬・宇野氏に連なるものと位置づけています。画主が法体でなく俗形であることから広瀬・宇野氏に関わる人物が描かれたと推測することもできます。あるいは豊臣（羽柴）秀吉の軍に宇野氏が滅亡させられた後、新たに吉光女としての性格を付与されたのかもしれません。

伝吉光女像　由緒書

このように本史料は、中世の真宗史を知る上でも、また宗粟の歴史を考える上でも非常に重要な史料といえるでしょう。

おわりに

以上、昨年度指定した文化財のうち、円空像と伝吉光女像について簡略ではございますが概説いたしました。

前述のように、中世宗粟の領主であった宇野氏一族は織田信長と敵対し、豊臣秀吉率いる軍勢に滅ぼされました。その影響で、宇野氏など領主に関する史料には制約があるという問題があります。しかし、今回の指定文化財の調査により、今だ謎の多い宗粟

の中世史に関する歴史も少しずつ紐解かれつつあるように感じます。

末尾になりますがこの場をお借りし、調査にご協力頂きました（宗）西光寺様、ご所見を賜りました橋村愛子学芸員に、お礼申し上げます。

（文責・片山悠太）

参考文献

『山崎町史』兵庫県山崎町　一九七七

『兵庫県史 史料編 中世3』兵庫県　一九八八

小林楓村・安井俊二『「播磨」第三十九号　宍粟郡誌』西播史談会・小林楓村　一九五八

兵庫県宍粟郡役所『兵庫県宍粟郡誌』（復刻版）臨川書店　一九八五

片山昭悟『宍粟郡の梵鐘　播磨国宍粟郡金屋村鋳物師　長谷川氏を中心に』　二〇〇〇

橋村愛子「宍粟市御形神社と西光寺の中世絵画」『兵庫県立歴史博物館紀要 塵芥 第二十四号』）兵庫県立歴史博物館　二〇一三

『大阪の町と本願寺』大阪市立博物館・毎日新聞社　一九九六

「天地明察」と闇斎先生

鎌田　裕明

はじめに

闇斎神社で祀られている山崎にゆかりのある山崎闇斎先生とは、歴史にどのような足跡を残された方なのでしょうか。このような疑問に映画「天地明察」（註1）は具体的に答えてくれます。全編を通じて闇斎先生の登場は一五分ぐらいですが、映画の主人公安井算哲の師として算哲を叱咤激励し、会津藩主保科正之とともに貞享暦（貞享元・一六八四年に完成した）作成を支えた様子が描かれています。算哲はのち、幕府の天文方（今の気象庁長官）に任じられますが、師や当時の幕閣トップとの出会いを経て、志を持って暦編纂事業に精励する姿は感動的でした。

映画では、闇斎先生の民族国家論や宇宙観が述べられ、天や理、そして道という普遍的な理念についての考え方がやさしく語られる場面もあり、二時間二一分の上映時間を短く感じたことでした。

山崎闇斎先生については「山崎闇斎座像」の宍粟市文化財指定を期に、本誌117号に宍粟市教育委員会による「山崎闇斎座像」及び闇斎先生についての若干の解説が掲載されました。また、山崎闇斎研究会が『闇斎神社と山崎闇斎』というリーフレットを三回にわたり発刊しました。これらによって闇斎先生につい

てはかなりの基本的な情報を得ることが出来るようになりましたが、未だ十分とは言えません。私達は、このたび「天地明察」の上映を機に、同映画のチラシ裏面と、別紙Ａ４裏表版を使って「映画『天地明察』と山崎闇斎先生」についていくらかの解説を行いました。小論では、これらを加筆訂正するとともに、今日なぜ闇斎先生なのかという観点からの記述を加えました。

一　闇斎先生と山崎町

闇斎神社は、山崎町西鹿沢１８２の１番地にあります。ここはかって闇斎屋敷と呼ばれており、山崎闇斎の祖父又四郎（号は浄泉）が住んでいたと伝えられています。闇斎先生自身の記した『山崎家譜』（註２）にも祖父は山崎の人とあり、「弘治三年（１５５７）播州宍粟郡山崎村に生まれた」と記されています。浄泉は秀吉の正妻ねねの兄、木下家定（註３）に仕えていました。家定は、天正十五年（１５８７）播磨で一万一千石、八年後には姫路で二万五千石の城主でした。慶長十九年（１６１４）の大坂冬の陣、翌年の大坂夏の陣の後、闇斎さんの父親は木下家から暇を貰って浪人となり、京都で鍼医として暮らしを立てることになりました。

当地の闇斎神社は、昭和十五年（１９４０）京都の垂加社（京都の下御霊神社内にある山崎闇斎神社の別名）より分霊を受けて建立されました。昭和十六年（１９４１）年に大門、門長屋を修築、この年、「山崎闇斎先生祖考の碑」が表面は有馬良橘（註４）氏揮毫、裏面は当時の闇斎学の泰斗内田周平氏の揮毫撰文を得て設置されました。

二　映画「天地明察」と暦（註５）について

米作中心の農業社会にあつては種まき、田植え、そして刈り取りを何時するかという時を決めるのは収穫の多寡を左右しました。また晴天の日に突然日がかげり始める日蝕は人々に大きな脅威であり、天の成す技であり、ましてこれの始まりを予測するなどは人を超えた技でありました。

古来、暦は天の運行の原則に分け入り、時を刻み、時間を支配するもので、その権限は年号の制定として天皇家・朝廷が行使してきたものでした。暦の編纂と発行権もこの系列下の貴族と周辺の商家に属していました。

日本には、六世紀半ば百済を介して元嘉（げんか）暦（北京あたりを基準点として観測し作成した）が入り、以来この暦ほか大陸製の宣明暦、授時暦を使ってきました。これでは誤差が出るのは避けられません。当然、日本基準で、日本人による暦の作成が強く求められていました（註６）。

このような時代の要請や、保科正之をはじめ水戸光圀の期待に応えたのが安井算哲であったのです。

三　闇斎先生の歴史的意義

このことについては数多くの学者・文人の言説があります。こ

こでは5人に限って紹介します。

①丸谷才一（註7）『輝く日の宮』　国文学者である作中人物に語らせて、歴史上の人物で呼び捨てでない人は、「大楠公、北畠親房卿、伊藤春畝公、外に（呼び捨てず先生をつけるのは…引用者註）先生は、山崎闇斎先生、藤田東湖先生、山鹿素行先生」と書いています。

②国権論者であった徳富蘇峰（註8）昭和十一年、『近世日本国民史』の中で「山崎学の影響は、勤王思想、国体思想の発達に対して、実に甚大」であったと述べています。

③経済・政治・数学をこなす稀代の博学、小室直樹（註9）は平成十五年、『論理の方法』の中で闇斎学の修己と予定説に注目し「日本で予定説が天皇教を貫いていることを発見したのは崎門の学です。それによって行動的禁欲が生まれ、それがエトスの変革を呼び、伝統主義を打破して、明治維新を生み出した。」と述べ、「カルビニズムと同様の役割」を果たした、とその歴史的意義を宣揚しています。

④山崎でも講演いただいた闇斎研究の第一人者、東海大学の田尻祐一郎教授（註10）は、平成二十三年二月十四日付け、本條衛山崎闇斎研究会名誉会長への書簡で闇斎さんの面白いのは、「自分の心を見つめて、その中に、今ある自己を越えた、何物かがあることを尊重し、敬虔な態度でそれに向きあおうとしたことです。」と述べておられます。また、先生の「江戸の思想史」で、「江戸の思想家が格闘した問題群は…根底について見れば、やはり私たち自身の問題だ」と、今日の私たちの問題意識に重ねて思想家を捉える視点を強調されています。

⑤丸山眞男（註11）は「闇斎と崎門学派は自らの学を形而上学として構築し、併せて修己治人を本質とするイデオロギーとして対象的認識を越えた自らの知行に渉るものとした。学ぶことが出処進退への厳しい自己規律を課すことになり、正統をめぐる争いは両極性の統一という豊かさを間一髪のバランスと緊張の中で確保することになった。」と認識即実践を当為とする厳しい生き方を評価しています。

ここで紹介した以外に、闇斎学は、存在論（存在の一般的な構造とそこに含まれる人間の位置づけ）、思想史（註12）、倫理学（人間学…天と人、「理」と「気」、「心」と「身」）政治学（註13）、方法論（修養論・居敬・窮理、敬）、そして垂加神道にわたる領域に多数の学者による研究とその成果としての著書があります。

闇斎先生とその学統につながる人たちは崎門学派といわれ、朱子学はもとより日本思想史の中で大きな位置を占めています。（註14）

四　闇斎先生の学問

ここでは関係者の間で話題になっている人間観と自己中心性の克服などについて紹介します。

①人に本来そなわっているもの

山崎闇斎は「敬斎箴序」（註15）の中で「人之一身五倫備

焉、而主乎身者心也。是故心敬、即一身修、而五倫明矣」（人の一身五倫備わりて、身に主たるは心なり。この故に心敬すれば、即ち一身修まりて五倫明らかなり）と述べ、続けて、「此語（先の引用の文）ガ某『敬斎箴』ノ見取（多くの中から選んだ）ゾ。一身五倫ノ説ハソノ理ハ有リテ、人ノカウハ言ハヌコトゾ。」と書き、「敬斎箴」の基本概念が集約されているとの考えを示しています。人にはもともと五倫が備わっているというのは、人間観の基本をなすもので、この上に闇斎先生の所説が構築されています。

田尻先生は五倫に関してこれが人間のつながりの基を成すと次のように説かれます。「五倫は、父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友という五つの人間関係で、儒教は伝統的にこれによって個我ではない社会的な存在としての人間をイメージする。一身は振る舞い、行動と読み替え、したがって私達が何か行動するのは、必ず人間関係の網の目の中で、ある役割を担ってである。私がいて役割を担うのでなく、時と場合に応じた役割の総体が私である。」（註16）

この五倫に対応する親、義、別、序、信を以て人に内在する善なる品性・徳であることから、わたしは、この所謂「一身五倫ノ説」が朱子の「大学章句序」（註17）における「蓋し天の生民を降すよりは、即ち既にこれに与えうるに仁義礼智の性を以てせざる莫し。」に匹敵する命題と考えています。このような人間観の上に、人への期待や信頼が基礎付けられ、経世済民の諸策が展開していくということですから、人間観は学の構造の土台であり、論理の前提をなすといえます。

さて一身五倫の説は、人の行動は五つの人間関係のいずれかにあてはまっており、それはいずれも社会での人との関係性の中での行動です。それはまた「親」、「義」、「別」、「序」、「信」という人の守るべき道の要諦と重なるものです。人は決して一人で生きるのではなく、人の道を理解し、それを踏まえて行動する心を持ち人の間で生きる存在です。一身五倫の説には人間への限りない信頼と人間肯定の賛歌があるように思われます。

②自己中心性を超えるために

私達は、上で見たように、暮らしの中で五つの人間関係(五倫＝父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友）の相のもとに、他者とのつながりの中で生きています。このなかで自己中心的な自己からどのように解放されるのか。それは他者とのつながり（人倫）の中に於いて自己を見つめる（註18）ことによってです。自己の内にあって自己を超えるもの、自己の内のより深い本源に潜む本来の自己をみつめることによってである。そのとき、心は「神明の舎（やどり）」（註19）であり、「一身の主宰（しゅさい）」（心は、はかり知れないすぐれたはたらきが宿るもので、わが身をしっかりとみちびいてくれるものだ）である、と闇斎先生は説いています。

ここで大切なのは、第一に私達が生きていくうえで人との人間関係の中での暮らしは不可欠である。この中で人々といろんな関係性をむすび、今風に言えば社会的動物として行動に必要な資質

を身につけていくのです。第二に、心はわが身を正しく導いてくれるものだということです。それは心が、「人の神明、衆理を備えて万事に応ずる者なり」（註20）であり「理気妙合した者」（註21）であるからです。

おわりに

編集会議で、闇齋さんと「天地明察」について書いてみてはどうか、との話が出て、つい受けてしまいました。資料もあることだしと先延ばししていたところ、片山昭悟委員長から督促を受け、取り急ぎまとめました。今更ながら、闇齋先生に係る書の多さと研究書の難解さに、梅雨明け前後の暑い数日を悩まされたことでした。今後は、「それ敬の一字は儒学の始めを成し、終わりを成す工夫にして、その来たること久遠也。」（註22）という敬について、さらなる学びを研究会の皆さんと共に深めていければと思っています。敬が五倫の中でどう働き、道の認識と実践にどう関わっているかを知るのが楽しみです。

註

1　映画「天地明察」の原作は冲方丁（うぶかたとう）が平成二十二年本屋大賞を得た同名の書です。「天地明察」は十七世紀後半の将軍家綱・綱吉の時代、安井算哲の青春を当時一流の数学者、政治家、そして思想家山崎闇齋との出会いを通して描いています。明察とは算術の問いに対する正解という意味で、「天地明察」とは暦が時の移ろいを予告していることから、正しい暦という意味。

2　『山崎家譜』は、岡田武彦『山崎闇齋』明徳出版昭和六〇年版巻末一八六～一九八頁に収録されている。はじめに闇齋自筆の『山崎家譜』続いて、山田連の『闇齋先生年譜』があります。年譜には天保九年に山口重明の跋が付けられており、歴史の整理には一級資料です。

3　この木下家は元和元（一六一六）年、備中足守藩二万五千石に封ぜられ維新まで存続しました。

4　有馬良橘は、日本海海戦時、参謀として秋山真之の上官であった。のち海軍大将、明治神宮宮司となった。司馬遼太郎は『坂の上の雲』で彼らの活躍を描いています。

5　暦については、幕府の政治体制に律令制（平安時代に整備され位階官職の制度や年号の制定権等は、カタチとして江戸末期まで存続し、社会の一種の安全弁又はヒエラルキー補強の役割を果たしたといわれている）の影又は残滓を観取する視点は欠かせないように思われます。律令制の影によって権威を強化しようとし、いくらかの利権を得ようとする京都の古代的な勢力と、これに対する江戸の幕府・武士層の勢力の構図。これらの状況の上にのみ、保科正之、水戸光圀、酒井忠清、堀田正俊等幕閣の要人が改暦に積極的な理解を示した理由が納得できるのです。

思想史的な観点からは、田尻祐一郎『山崎闇齋の世界』二〇〇六年ペリカン社版一五〇頁に「時間の支配」というキーワードを用いた明快な説明がある。

6　安井算哲の暦の優れた点は、冲方丁の『天地明察』前掲書四四二頁によると、「地球の公転速度（楕円の公転軌道との関わり）と観測点の緯度を暦作成に反映させた」こととあります。暦については、内田正男『暦の語る日本の歴史』吉川弘文館二〇〇八年版七五頁には「暦を支配する者は国家を支配する」という至言があります。

7　丸谷才一『輝く日の宮』講談社文庫二〇一〇年版五七頁

8　徳富蘇峰『近世日本国民史』徳川幕府上期（下巻）思想編民友社 大正一四年版 六二九頁

9　小室直樹『論理の方法』東洋経済新報社 二〇〇三年版 二九二頁

10　田尻祐一郎『江戸の思想史』中公新書 二〇一一年版 二三二頁

11　丸山眞男『闇斎学と崎門学派』岩波日本思想大系31・山崎闇斎学派 岩波書店一九八〇年 版 六一五～六一六頁
山崎闇斎の「敬斎箴序」は七四頁「闇斎先生講説」の「五倫一身」は九七頁

12　子安宣邦『江戸思想史講義』岩波現代文庫二〇一〇年版江戸時代の言説空間への視点と言説分析という思想史の方法を踏まえて江戸思想の読み直しを行った。この方法による闇斎研究は田尻祐一郎氏のものでもあります。

13　朴鴻圭『山崎闇斎の政治理念』東京大学出版会 二〇〇二年版 闇斎の独創性は「徳川体制に対して事のレベルでは沈黙し、道のレベルでは対抗した。」一七七頁 また、「敬義学における理念性・普遍性を土台にして既成の神道を読み替えた垂加 神道」を創った。二一三頁

14　闇斎先生の学統や系譜については、本條衛山崎闇斎研究会名誉会長の労作「崎門学派系譜」があり、一九五名の学者が整理・分類されています。

15　山崎闇斎「敬斎箴序」註11参照

16　田尻祐一郎『山崎闇斎の世界』ぺりかん社二〇〇六年版一六〇～一六一頁

17　『大学』講談社二〇〇七年学術文庫十一頁

18　田尻祐一郎『山崎闇斎の世界』（前掲） 一八〇頁

19　牛尾弘孝『山崎闇斎』平成一七年 支林館 二九頁

20　山崎闇斎『大学垂加先生講義』岩波日本思想大系31（前掲）四四頁

21　山崎闇斎 同右 五六頁

22　山崎闇斎『敬斎箴講義』 岩波日本思想大系３１（前掲）八〇頁

第九回 山崎ウォーキング&ウォッチング
篠の丸城跡見学に参加して

竹内克司

平成二十五年五月三日（金）午前十時と、午後一時三十分の二回に分けて、山崎郷土研究会員・宍粟城郭研究会のメンバーが篠の丸城跡見学探索の案内をした。

午前中の参加者は五十名、午後は四十名。その内市外からの参加者が半数近くあった。

篠の丸城は南を意識した城で、大手口は山崎町門前の八幡神社にあり、搦手口は同町横須にある。参加者の安全のために「もみじ山」から登城し、帰路に八幡神社に下った。

現在の登山道は、昭和十年～十二年、妙勝寺関係者の寄付で妙見堂の建設と篠の丸公園一帯の整備によりできたものである。以後門前、上寺からの篠の丸中腹まで行ける車道ができた。中腹の車場からでは、妙見宮の鳥居をくぐって約二十分で登ることができる。

おもな解説の要点

・篠の丸城跡の大手道は、八幡神社の裏につづく道から鳥居の右手の尾根筋状にあったこと。

・登山道は歩きやすく整備されているが、本郭（屋形郭）の南部分が切り込まれている。また休息小屋の周辺や階段で郭の一部が破壊されている。

・本郭は広く方形居館と考えられ、鬼門をさけるため東北の角や裏鬼門の南西の角を丸く整えている。

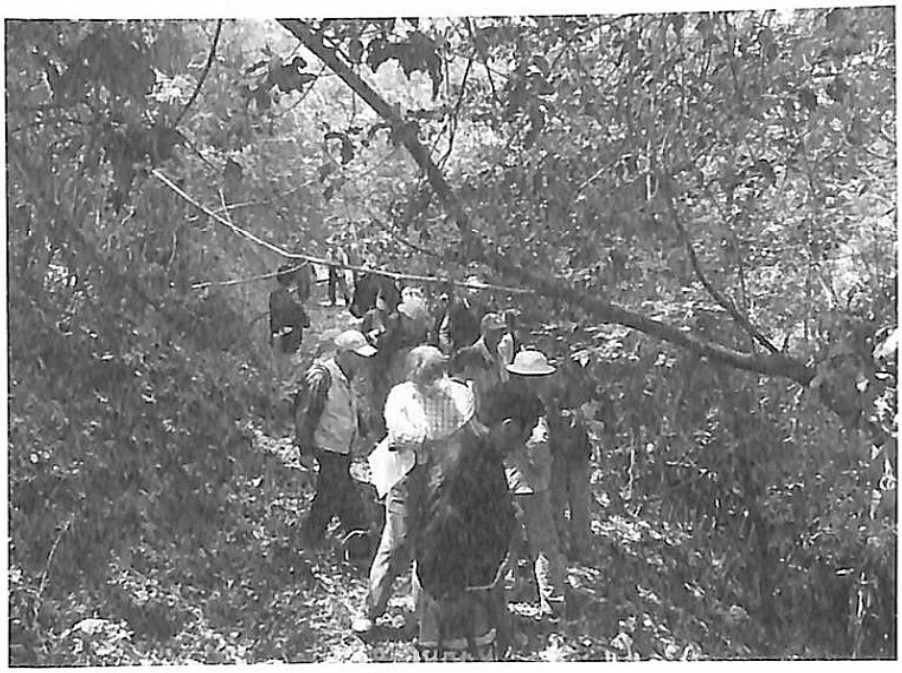
・注目すべきは南の大手道の虎口（こぐち）（入口）で、敵の勢力を分散させるための工夫などが南郭（くるわ）群（六つの郭）をぬける道を確認。

・城に必要な水を確保のための溜井戸と水を誘導する工夫。

・西詰め郭の急坂の先には、三本の幅五メートルの堀切。これらは西にのびる尾根筋からの外敵の侵入を防ぐ。

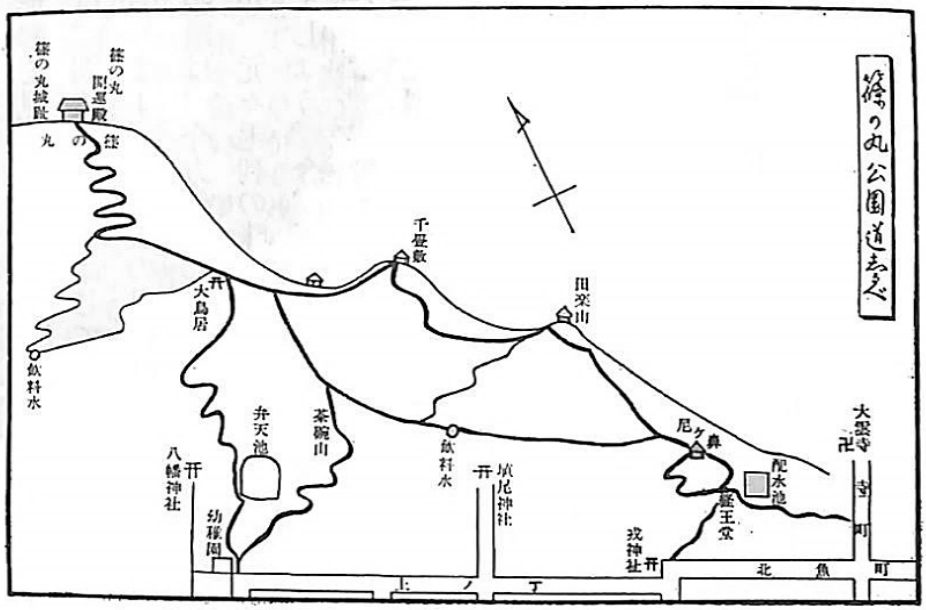
・北側の急斜面に多くの畝状竪堀（うねじょうたてぼり）。これらが西北からの外敵の侵入を阻む。

このようなほとんど地元の者でも知らなかった篠の丸城跡の現地説明が行われた。



篠の丸城跡見学会

宇野氏が篠の丸城を本城として、中世の長きにわたって君臨した城郭、中世末期の戦乱の結果、宍粟郡の領主となった黒田官兵衛ゆかりの地であることを知れば、長水城跡とともに宍粟市民が誇りうる城跡・歴史的文化財であることを説明会の中で再度確認した。



昭和三十二年発行「篠の丸公園と妙見堂」付図

新篠の丸私記（四）

（一一八号から続く）

深川定義

十五　謀略

その翌日、有元、安積、志水の三名は会合をして、「各々、長水の政頼殿の申し分、余りにも無法でござる。深夜に侵入したる小林某を見咎めたる高見に切腹を申付けた上、我が君にも屹度慎めとは何事じゃ。かくなる上は他に道なし。我が君にご決断願い、政頼父子を謀（はかりごと）を以て亡ぼすばかりじゃ。」「如何にも。」と三名は意見が一致した。

篠の丸城主熊見光景の五家老の内、高嶋直隆、高見善信の両名は温和な性格で、長水城と平和共立を希望し、有元祐美、安積盛長、志水永宗は、光景が嫡男なれば長水城を相続するのが当然と強く考えていた。三家老は光景に向かい「殿、長水の政頼殿は嫡子の殿を差し置いて、二男の民部殿に家督を譲られましょう。さらに、民部殿は、政頼殿ご逝去の跡には、殿に暇乞い給わることは必定。如何にしても長水の父子を謀を用いて殺害し、長水の主と成られますように。」と言葉を尽くして勧めたけれど、光景は「これ、何を申すのじゃ。我父ながら、政頼殿はひどい方じゃ。さりとて、謀を以て害するなど、子としてできることではない。二度と申すな。」「孝心深い殿なれば、左様仰せられるとは存じました。されども、

殿、今天下の形勢を見まするに……」と有元は大きく出た。

「織田信長公は、羽柴秀吉公に命じて中国平定を企てて、今、三木を攻めております。その次の目標は、長水と英賀でありましょう。政頼殿は、今方便として、一時秀吉公と和睦をしておられますが、元々毛利の味方。やがて必ず羽柴勢と本格的な戦となりましょう。今、天下に秀吉公に勝てる者はおりませぬ。戦となれば、宇野家は滅びまする。そうなればご先祖へのご不孝これに過ぎず。一時のご不孝ではござりますが、政頼殿祐清殿を害し給い、我が君が長水の主と成られ、秀吉公と真の和睦をなさることが、宇野家存続の唯一の道でございます。秀吉公の門家上月豊後守は、拙者に所縁あり、何かと便宜もございましょう。」

十六　光景の主要な家臣

有元が言葉巧みに説けば、光景の心も迷う。幼時継母にいじめられたのも、お忠を溺愛する政頼が制止しなかったからだ。さりながら、親を殺すは五逆の大罪、しかし、宇野家の滅亡を阻止するためには止むを得ぬというのか。こうして光景は、遂に有元に同意してしまった。

光景の主要な家臣の名を左に記す。

上席家老　高嶋甲斐守直隆、家老　有元治郎左衛門祐美、同　安積弾正盛長、同　志水八右衛門永宗、同　高見新左衛門善信、

三宅甚左衛門　三宅新八郎　内山甚右衛門　河嶋長九郎　菊地尻八郎太夫　具（とも）七郎兵衛　浜名与三右衛門　神戸孫三郎　山崎重太郎　森下政太郎　千草八郎　千草太郎　黒岩重蔵　柏原正兵衛

これらの人々を始めとして、光景の家来の数七十七名という（篠の丸落城時の人数）。

十七　露　顕

有元らは、このような企みは一日も早く掛らなければ成就しがたしとして、柏原正兵衛と千草太郎を使者として長水城へ遣わし、茶の会に接待したき旨申し上げる。政頼父子承知と返答する。祐清の臣小林助太郎が、光景らに悪謀の風聞ある旨を告げる。祐清は、それは光景を憎む人の申し立てたことではないかと言う。助太郎重ねて、当世の人の心は父を殺し君を害することも計りがたい。彼の邸へお出でのこと御延引あって、ことの実否をお糺しなさるよう、と申し上げる。

祐清は父政頼にもこのことを話せば、政頼大いに驚き怒り、急ぎ追手を差し向けんと言うを、祐清は斯様なことには、奸佞の者あって虚言を申すことも無きにしもあらざれば、真偽を糺して後然るべくと申せば、政頼も同意する。光景の上席家老高嶋甲斐守直隆は、この謀略を不安に思っていたが、遂に篠の丸城を去り、妻子を連れて夜の内に長水城へと移る。

十八　落　城

光景の筆頭家老高嶋が、有元らの陰謀に同調せず、長水へ登り一切を告げたので、政頼は遂に討手を差し向ける事に決し、五十波構の宇野采女正祐政に命じ、左三つ巴に二つ引の白旗を押し立て、軍勢百五十余騎を引き連れて討ち向かう（山崎町史には今一人の寄せ手の将として内海左兵衛の名あり）。さて、光景は何も知らず、ただ政頼父子の来るのを待っていたが、高嶋甲斐が妻子を引連れて、夜の内に長水城へ登った由を風聞し、彼は政頼に企てを知らすであろう。今は是非なし。一先ず作州の方へ落ちんと、俄にその仕度をするところへ、早くも宇野采女正の兵百五十騎が攻め寄せてきた。光景も今は止むなく、七十七人の同勢を以て迎え討ち、散々に斬り結び、さっと退いて魚鱗（ぎょりん・中央が前進し、左右が控える陣型、左右が前進し、中央が控えるのは鶴翼＝かくよく）に備え立て、双方ともに斬りつ斬られつ、阿修羅の如く攻め戦う。

双方ともに、相当の手負い死者あり。殊に光景方は始めから小勢のこととて、やがて残る者十数名に過ぎず。その上、光景も数か所に傷を負い、伊沢川のほとりで、残る者らに防ぎ矢を射させて自害した。残る者らは寄せ手に最後の戦を挑み、一人残らず討死または自害して果て、篠の丸城は完全に壊滅した。

時に天正七年（一五七九）六月十五日。

次に異説を記します。

長水方は、深夜に篠の丸に不意討ちを仕掛ければ、何の備えもない篠の丸は大いに狼敗しなす術もなく、城を追い立てられ（魚鱗の構えなど思いもよらぬ）、光景の妻は矢に当たって死に、光景も伊沢川のほとりに到って、ももに矢を受けて立てなくなり自害、家来らも討死または自害し、落城に及ぶ（混乱に紛れて逃亡した者もあったろう。降伏した者も居たかもしれぬ）。

なお、その後の篠の丸城は寄せ手の一将内海左兵衛が在城したとも言う。山崎町史、遠藤島生説、熊見水槻夫（みきお）説等の異説がある。

十九　秀吉長水城攻め決定

有元の話を聞いた上月は、早速姫路城に赴き、羽柴秀吉に会い、宇野政頼・祐清が秀吉に叛意ある旨、声高く申し述べた。秀吉は、上月から聞かずとも、秀吉に好意的な光景を、長水方が夜討ちして殺したことは知っていただろうが、それでも長水城へ使者を送り、秀吉に味方するよう勧告する。秀吉は即時「応」と答えなければ城攻めと決めていたのであろう。翌日、城からの使者（隠居政頼）を追い返してしまう。

城方でも当然戦に備える。時に天正八年（一五八〇）三月中頃であった。

二十　篠の丸城の城主

篠の丸城築城は、元弘年間（一三三一～三四）後醍醐天皇が鎌倉幕府打倒を企て、敗れた頃である。宍粟河東住（山崎町岸田カ）釜内小次郎範春（初代）の築城と云う。長水城より二十年位古い（長水城は正平七・文和一＝一三五二年頃と云う）。釜内は、宇野新太夫為助（赤松の祖家範の父山田則景の兄が為助カ）の裔と伝えられる。一時赤松貞範の長男顕範（2代）が在城（貞和の頃）、彼が飾東、庄山城へ転じて後、長水城主の弟広瀬師範（3代）が応安年中（一三六八～七五）在城、則康、満範と続き、嘉吉の乱（一四四一年）にて満範死、六十歳と山崎町史に記す（新宮町吉島、長谷川文書）。また、赤松秘士録及び西光寺文書には、宇野重氏（那波城）、頼行（源太郎篠ノ丸）（4代）、秀盛（小八郎能登守）（5代）、則盛（四郎）（6代）、景盛（彦五郎下野守）（7代）、これを釜内六代とし、景盛は三百丁領嘉吉の乱に参戦と云う。

これらによると、釜内範春（一三三一年頃より）、赤松顕範（一三五〇年頃）、広瀬師範、宇野（釜内）頼行、秀盛、則盛、景盛にて嘉吉の乱に逢う。

赤松再興後は赤松満範の孫祐則（8代）、則国（9代）が広瀬・野村を領して在城。天文十一年（一五四二）則国八十三歳にて死去す。この頃の城の別名を稲垣城とも称した（新宮町長谷川系図）。後は宇野源一郎光景改め、熊見蔵人光景（10代）が在城、永禄九年（一五六六）四月より天正七年（一五七九）六月、光景死後は内海左兵衛（11代）が在城（長水城の一将）、翌天正八年四月、秀吉の中国攻めによって落城。左兵衛のその後は不詳。篠の丸城は、以後全く廃城となった。

二十一　残影

篠の丸城と長水城は、宍粟市における二大古城と言える。今、二城跡に登って見ると、誰もその感覚や印象が異なることに気がつくであろう。一つは山容も温和、一つは急峻、山を構成する岩石の質は、一つは粘板岩（水成岩）、一つは流紋岩（火成岩）より成る。山の標高差は二五〇メートル近くある。一つは土の城、一つは石の城のような印象である。両城ともに落城以来四百三十有余年の星霜を既に経たのである。

本編は始めに記したとおり、宇田義雄氏の著作に加筆または一部省略したものである。宇田氏は既に昭和十四年三月十日逝去されている。時に享年七十四歳であった。

（註）熊見水槻雄代＝故人　赤穂の人、長水城の歴史について、昭和の中頃に長文の手記本を書く。姓から考えて熊見光景に縁のある人の裔か？

―了―

二十五年度の研修旅行のお知らせ

研修部

日　時　九月二十九日（日）午前七時三十分
　　神姫バス山崎待合所出発
行　先　奈良方面　国宝栄山寺・
　　奈良県立歴史万葉館他の予定
　　参加費　一人　五〇〇〇円

今年は山崎文化協会と合同です。
お申し込みは、九月二日より二十五日まで
神姫バス山崎待合所内
　神姫観光山崎案内所へお願いします。
今年度は多数のご参加が予定されます。
定員の四十五名になりますと、締切となりますので、早目にお申し込みください。
詳しくは、会報本紙に挿んでいる、研修旅行案内書をご覧ください。

事務局だより

平成二十五年度の通常総会が開催されました

去る四月十四日（日）午後二時より、宍粟防災センター四階会議室において開催され、二十四年度の諸事項報告及び二十五年度の事業計画等が承認されました。
本年は、役員の改選の年で、別記のように役員が、選出されました。
終了後、記念講演にかわり、ＤＶＤしそうの逸話「黒田官兵衛」を鑑賞しました。

平成二十五・二十六年度役員名簿

役職名	氏名	住所	電話
会長	大谷　司郎		
副会長	浅田　茂樹		
事務局長	里見　亘		
会報部長	片山　昭悟		
研修部長	坂本　忠彦		
史跡部長	伊野　操治		
山崎地区西支部長	垣口ちる子		
山崎地区東支部長	柳田　弘		
山崎地区北支部長	伊野　操治		
城下地区支部長	片山　英之		
戸原地区支部長	金山　敞史		
河東地区支部長	衣笠弘一郎		
神野地区支部長	春名　俊夫		
蔦沢地区支部長	宗平　圭司		
菅野地区支部長	浅田　茂樹		
土万地区支部長	赤松　茂毅		
監事	河本　雅視		
監事	三宅　保雄		

役職名	氏名	住所	電話
顧問	春名　俊夫		

平成二十五・二十六年度　各部構成

会長	片山　昭悟	報部長	山崎　悟
竹内　克司	鎌田　裕明	浅田　耕三	河本　雅視
研修部長	坂本　忠彦	史跡部長	伊野　操治
宗平　圭司	石野　和雄	柳田　弘	伊藤　一郎

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ

●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS

本　　店　TEL(0790)62-0700
さつき通り　FAX(0790)62-2117
ブックランド店　TEL(0790)64-2051
山崎町中井　FAX(0790)64-2052

パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有)稲田印刷

〈本　社〉〒671－2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62－0254 FAX(0790)62－4764
〈一宮店連絡先〉TEL(0790)72－8600

まごころを伝えます。

一献献上　品質本位
地酒
播州一献

山陽盃
確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010　FAX0790(62)6218
E-mail　info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光

〒671-2576　兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
TEL(0790)62－7588
FAX(0790)62－0770

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手つくりの御菓子を
御菓子司あらき
本　店：播州山崎町山田（電）62－0160

外科・内科
山中医院
院長　山中潤一

山崎町西町・TEL(62)0036

生谷温泉（いざだに）伊沢の里

いつも伊沢の里をご利用くださいましてありがとうございます。心から感謝を申し上げます。
これからも、是非、お祝い、ご法要、ご会食、団欒など会席料理から鍋物、そして定食など、なんなりと是非お申し付けくださいませ。ご予算に応じて調理させていただきます。
また、無料送迎バスもご利用ください。
おいでをお待ちいたしております。

Tel.0790-63-1380　Fax.0790-63-0362